

# 韓国大学生の語る怪談・都市伝説

小澤 康 則

## I. はじめに

日本語授業での出来事である。ある男子学生が、電車に乗るとき、乗り場であつまずき怪我をしそうになったという話をした。特に何もないのにつまずいたというのだ。それだけなら、今後は注意するようになって話が終わるところだった。ところが、話をよく聞いてみると、実は同じ場所で先日もあつまずいて危なかったという。特に段になっているわけでもないのに、本人も不思議がっている。その時、ある女子学生が「それは処女鬼神だ」という発言をした。韓国では一般に「処女」というと未婚女性のことを指す。そして「鬼神」は幽霊、または化物を意味する。彼女が言うには、以前そこで未婚女性が不慮の事故、もしくは自殺を遂げた。その魂が救われず、若い男性を引きずり込もうとしているのだらうと言う。そして、たまたまあつまずきそうになった男性は、その処女鬼神の好みに合っていたのだらうと。最後は笑い話的な話へと変わったのだが、その「処女鬼神」という言葉が、なんとも韓国的な感じがして記憶に残った。韓国でも、怪談や都市伝説が語られている。日本と同じようなものもあれば、韓国的と思われるものもある。また、韓国のKBS放送の人気番組であった『伝説の故郷』<sup>(1)</sup>でも、多くの怪談や都市伝説が放映されて話題となった。韓国人も怪談や都市伝説に強い関心を持っているためと思われる。そこで、韓国では現在、どのような怪談が語られ、都市伝説が語られているのか調べてみることにした。

調査にあたっては、学校の怪談と都市伝説に

関して質問をしてみた。怪談を学校の怪談に限定したのは、日本との比較を前提としたためである。単に怪談といった場合、韓国の伝説や民間説話で語られるものが多く含まれるだろうと思われたからである<sup>(2)</sup>。調査対象は韓国外国語大学の学生で、筆者が教える「中級日本語会話」(2年生対象)12名、「韓日ビジネス翻訳演習」(3年生対象)33名、「インタビュー日本語」(4年生対象)12名の57名であった。調査方法は各授業のe-Class<sup>(3)</sup>の課題管理という機能を利用し、学校の怪談と韓国の都市伝説<sup>(4)</sup>に関して原文の韓国語と、訳文の日本語で書いてもらった。その結果、学校の怪談を50事例、都市伝説を49事例採集することができた<sup>(5)</sup>。本稿ではその調査事例をもとに<sup>(6)</sup>、その他の聞き取り調査や既存の事例を参考にしつつ論じていくことにする。

## II. 学校の怪談

### 1. 銅像<sup>(7)</sup>に関する怪談

学生たちが語る学校の怪談の中で一番多かったのが銅像に関する怪談であった。基本的には日本における二宮金次郎の銅像と同じく本を読んでいる銅像であるが、二宮像のように校庭を歩き回りながら本を読むというのとは違っていた。以下、韓国の事例を見てみよう。

●事例1. 私が通っていた小学校の近くにある別の小学校に、本を読んでいる少年像がありました。夜になると、その少年が本のページをめくります。その時、最後のページをめくる姿を見た人は死ぬという怪談がありました。

夜中に本をめくる方法にもいろいろあり、普

通は毎夜1ページをめくるのであるが、次のようにめくる例もある。

●事例2. 中学校の時、担任の先生が通っていた小学校の怪談を話してくれました。その学校のグラウンドには本を読んでいる兄妹の古い銅像があって、その銅像には一つの伝説があったそうです。それは、一年に一回、兄妹が読んでいる本がめくられるという事です。特に何も起こらない年には2ページ、学校に悪いことが起これば3ページ、そしていいことがあれば1ページずつめくられたそうです。それで、修学旅行で大きなバス事故があった年には、いつになく多くめくられていたそうです。先生が、学期の初め頃に怪談を耳にして定規で本の厚さを測って見たら5センチあまりでしたが、春休みにまた測って見たら6センチほどの厚さだったそうです。

ページをめくった結果に関しても幾種類かの違いがある。

●事例3. 本を読む少女の銅像の本のページが夜の12時になると1ページずつめくられ、そのページのめくられる瞬間を目撃すると死んでしまう。そしてページが最後までめくられると学校が崩壊する。

●事例4. 私より1年早く小学生になった兄と当時中学生、高校生だった親戚のお姉さんたちに、私が小学校に入学する直前に学校の運動場にある銅像に関する怪談を聞かされた。多分ほとんどの韓国の小学生は聞いたことのある怪談で、零時になると「本を読んでいる少女の銅像」の本のページが1ページずつ勝手にめくられ、最後までページがめくられるとその少女（の銅像）が図書館に行って新しい本を持ってきて読みはじめるという話だった。

事例3に比べ事例4はなんとなく微笑ましさを感じさせる内容ではあるが、銅像が動くこと自体、小学生にとっては立派な怪談だったのであろう。

学校の銅像には少年、少女、兄妹などの例があるのだが<sup>(8)</sup>、そうではなく、人物が特定され

ている場合もある。世宗大王<sup>(9)</sup>や檀君<sup>(10)</sup>がその例である。

●事例5. 私が小学校の時に聞いた学校怪談について紹介します。私の小学校の建物の前には世宗大王が座って本を読んでいる銅像がありました。怪談によると夜12時になると世宗大王の読んでいる本が1ページずつめくれるということでした。

●事例6. 小学校の時、運動場の隅に檀君像がありました。なぜかはわかりませんが、当時の小学校にはだいたい檀君像が立てられていました。たいがいの韓国の銅像がそうであるように、この檀君像にも同じような怪談がありました。それは午前零時になると檀君像が蘇って動き始めるというものでした。

世宗大王は座って本を読んでいるとあるのだが、檀君では本を読んでいることに言及していない。始祖神であるのだから読む本がなくて当たり前なのであろうが、学校の銅像としてはなにか物足りなさを感じる。ところで、ここに李舜臣<sup>(11)</sup>の銅像が加わると、話はややこしくなってくる。

●事例7. 小学校に入学して2年生の先輩から奇妙な話を聞いた。それは私たちの学校の運動場にある銅像が夜9時になると蘇生してお互いに戦うということだった。彼らは世宗大王のチームと李舜臣のチームに分かれて、戦いに勝ったチームのみが翌日まで楽しく遊ぶことができると言う。朝になって、誰かが学校に来れば遊んでいた銅像は驚いて突然その姿勢のまま停止する。だから学校に行って像をよく見ると、前日とは別の姿勢でいることがわかるという。実際、銅像には朱色の傷跡があり、小学生の時は6年間その話を信じていた<sup>(12)</sup>。

世宗大王も李舜臣もともに韓国人が尊敬する歴史上の人物で1、2位を争う。前者が文の代表であるならば、後者は武の代表であるとも言える。小学生たちにもそれぞれ好みがあり、世宗大王派と李舜臣派に分かれたのかもしれない。そして世宗大王チームと李舜臣チームが争

うというのは、子供たちの「遊び場の取り合い」をモチーフとしているのではないだろうか。事例4と同様、微笑まじさを感じられる。

## 2. 立地条件に由来する怪談

韓国では歴史的に風水地理が重視される。現在でも、ビルや住宅の建築から墓地の選定まで、風水地理をもとになされることがある。学校の立地条件においても同様だと思われるのだが、学校の怪談だけを見ると、そうでもないらしい。

●事例8. 私が住んでる町は、昔、山だったところに家を建て住宅街にしたそうで、丘が非常に多い地域だ。それで、先輩たちから学校がただの山ではなく共同墓地の上に立てられたせいでお化けが多いとか、運動場を掘ってみると骨が見つかるとか色々わさを聞いた。

●事例9. 中学生の頃、友達の間で変なうわさがたちました。わたしが通っていた中学校は山にあったのですが、昔お墓があった場所に学校を建てたそうです。だから幽霊がよく出るというのです。毎晩12時を過ぎると学校の運動場にあるベンチに幽霊たちが座っていると、学校の後ろにある公園へ夜中3時に行くと死ぬという話でした。しかし、学校の前に警察署ができてからは幽霊が警察を怖がって学校に来ないという新しい怪談ができました。今思い出せばありえない話だと思いますが、そのときは本当にそんなお化け話が怖かったです。

共同墓地に学校が建てられたという事例の場合、山との関連が見られる。先述したように、韓国では墓地の選択にも風水地理が強く影響しており、山に作るのが普通とされていた<sup>13)</sup>。良いところに墓地を選べば、子孫が繁栄するとされていたからだ。それゆえ山には昔から墓が多く、山の中腹に建てられた学校であるなら、共同墓地があろうとなかろうと、墓と無縁であることはまずないであろう。ただ、この共同墓地の場合、事例9のように幽霊が警察署を怖がるなど、怪談として機能していかなくなる例もあ

る<sup>14)</sup>。次の事例も同様であろう。

●事例10. 学校の敷地を安値にするため、山頂にあった墓地を購入し、そこに新たな学校と寮を建てた。ところが度々幽霊が出現する。そこでお祓い屋さんに来てもらい、お札を貼り、灰と塩を供えてもらった。それ以降、しばらく幽霊が出なくなったが、ある生徒がトイレに供えられた灰と塩を崩してしまったため、時々幽霊がでるらしい。

宅地開発や都市化など、学校周辺の環境変化により怪談が怪談として機能しなくなってきているのであろうか<sup>15)</sup>。

●事例11. これは、私が中学生だった頃、先生にきいた話です。私が通っていた中学校は戦争中、負傷した兵隊が運ばれてくる病院だったそうです。毎朝8時20分から45分までの25分間は読書の時間です。その際、図書委員がちゃんと読書しているかチェックするのですが、先生によると、戦争中に働いていた看護婦さんの幽霊が生徒一人一人の顔を覗き込みながらチェックしていたそうです。

●事例12. 小学校の頃には学校のとなりに田んぼがあったのですが、その田んぼは朝鮮戦争の時の処刑場だったそうです。だから、学校にもお化けが出てくると言われていました。

共同墓地が山と関係していることはすでに述べたが、平地の場合はどうであろうか。事例11や12の病院（野戦病院）や田んぼなどは平地を意味している。その場合、韓国では墓地との関連付けができなくなるため、朝鮮戦争と関連付けられて語られるのであろう。日本でも「校舎の看護婦」<sup>16)</sup>などという学校の怪談では、以前病院だったという設定になっている。しかし韓国の場合、風水地理が影響して山あいでは墓地、平地では朝鮮戦争関係になっているという特徴を見ることができる。

ちなみに、銅像が動き出す動機として「共同墓地の上に学校が建てられたため、夜の12時になると銅像がみんな動き出す」などという事例もあった。

### 3. 特異空間に生まれる怪談

日本ではトイレ、音楽室、理科室などの特異な空間が学校の怪談の舞台になっている例が多い。これは韓国も同様であるようだ。少し長いですが、韓国のトイレに関する怪談を見てみることにする。

●事例13. 私は女子中を出ました。P中学出身ですが、私たちの学校は、校舎が2つあり、新校舎には1年生2年生が、旧校舎は3年生と職員室がありました。ある日、3年生の先輩が休み時間にトイレに行きました。ところがその日に限ってトイレが全部使用中でした。先輩は邪魔されないために一番端の個室に入ろうと順番を待っていました。ところが、しばらくして、その個室にいるであろう別の3年生の先輩から財布をあずかってほしいという頼みとともにトイレのドアの下から赤い財布と白い手がいきなり出てきました。先輩はどうせ同じ3年生がいるのだからと疑わずに分かったと答え、財布を受け取ってすぐに出てくるようにといたそうです。ところが授業チャイムが鳴りそうになるまで待っても、その個室はおろか、他の個室からさえ出てくる人が一人もいませんでした。焦った先輩はトイレはもとより授業に遅れるのも嫌だったため、早く出て来るよう怒鳴りましたが、中は静かだったらしいです。だから先輩は足でドアをけったりしましたが、中にいる人は全く応じなかったそうです。頭にきた先輩はバケツに水を汲んで上から水をかけるという行為をしたりもしたのですが、中の人は悲鳴すらあげなかったそうです。最後に先輩はドアを壊すことを決心し、足で蹴り開けようとしてしました。その瞬間、待っていた個室のドアだけでなく、他の個室のドアも全て同時にカシャッと開かれ、先輩は前にのめり込んだそうです。ところが驚いたことに、トイレの中には誰もいなく、またその隣も空いていたそうです。驚いた先輩が声をあげてトイレから出て必死に教室に戻って授業中の先生にさっき預かった財布を投げるように渡してトイレで起きたことをすべて

語りました。先生は先輩の目つきに偽りがなかったことが分かり、放送室にまで行って預けておいた赤い財布を取りに来るよう放送をしたらしいです。しかし、日がたち、月が変わり、年を経ても赤い財布の持ち主は現れず、その赤い財布はまだ先生の引き出しの中にあるのだそうです。

この怪談にはいくつかの要素が含まれていることがわかる。まず場所がトイレであること。そのトイレも1・2年生が使う新校舎ではなく旧校舎であること。そして、トイレの中から赤い財布と白い手が出てきたこと。この三要素が含まれているため、学校の怪談としては不必要に長くなっていると思われる。

トイレは閉ざされた空間であるため、人に恐怖感を与える。この事例の場合も、トイレの個室は全て使用中だが、待っているのは先輩だけという状況である。中の人は返事もしない。

●事例14. 私通っていた小学校は建物が二つあった。教室がある建物、それと図書館と科学室があり、あまり行かない建物の二つだ。その図書館があった建物の階段は螺旋階段だった。2階と3階の間にかかっている柳寛順(ユ・ガンスン)烈士<sup>(17)</sup>の額縁について様々な怪談があった。一つはその階段を使う時、どこから見ても柳寛順烈士が自分を見つめているということだった。二つ目は夜になると柳寛順烈士が、血の涙を流すというものだった。もちろん、誰も見たことなかったが、学校内では知らない人がいなくて、皆がその階段を避けるようになった。小学校3年生の時に友人から聞いた話だ。

●事例15. 高校の校内でたまに幽霊が出るという怪談が古くからありました。私はこの怪談を一年生の時、クラスの友だちから聞きました。その幽霊は幼い女の子で、主に音楽室で見られるそうです。人々を怖がらせたり恐ろしがらせず、ただ座って私たちが授業を聞く姿をずっと見ていると言うことでした。音楽室は本館ではなく、少し離れた建物の2階にあったのですが、隣のクラスの友だちが実際にそこで女の子の幽霊を見たと言いました。私は卒業するまで

見たことが一度もなかったのですが、もし実際に見たらとても怖かったらと思います。

建物が二つあった場合、どちらが特異な空間かという、新校舎よりは旧校舎であり、本館よりは別館であり、普通の教室よりは音楽室であろう。そして学校の怪談が先輩から後輩へと伝えられていくという性質上、古いものの方により多くの怪談が残っているということになる。

日本のトイレの怪談に「赤い紙と青い紙」というのがある。トイレに入った女の子が紙がなくて困っていると、「赤い紙が欲しいか、青い紙が欲しいか」と聞いてくる。赤と答えると血が降ってきて<sup>(18)</sup>血まみれになる、青と答えると血を抜かれて真っ青になるというものだ。この怪談にはいろいろなバージョンがあるのだが、色の組み合わせは基本的に赤と青だが、それに白が加わるケースもある。その場合の白は「白い手がぬっと出てくる」などというケースだ。

●事例16. この話は、私の友達から聞いた話です。韓国には卵おぼけ<sup>(19)</sup>というおぼけがいます。卵おぼけは、卵に手と足がついたおぼけで逆立ちで歩くということです。歩くとき、頭を床に打ちつけながら歩くので“トントントン”<sup>(20)</sup>という音がします。逆立ちをしながら歩くのでトイレのドアの下からのぞくということです。

●事例17. 学校のトイレで急に「赤い紙が欲しいか、青い紙が欲しいか」と尋ねられる。このとき絶対に返事をしてはならない。赤が欲しいという血まみれになって殺され、青が欲しいという血を抜かれて殺されます<sup>(21)</sup>。

つまり、「トイレのドアの下から」というのは韓国在来の卵おぼけに由来し、「赤い財布と白い手」は「赤い紙と青い紙」の怪談に由来していることがわかる。

ところで、事例16の卵おぼけは韓国在来のものであるのだが、今回の調査で卵おぼけに言及したのは事例16だけであった<sup>(22)</sup>。報告者は在外橋胞であり、韓国人学生から聞いたものであると言う。卵おぼけは現在のようなトイレではな

く、在来式で家の外にある便所に出るものであるという<sup>(23)</sup>。学校のトイレも教室にある現在では、卵おぼけのいるトイレがなくなったのであろうか。

#### 4. 校舎を徘徊するものたち

学校の怪談に出てくる幽霊や妖怪たちには、銅像のように校庭を舞台とするものもあれば、日本の花子さんや韓国の卵おぼけのようにトイレなどのような特異な空間を舞台とするものもいる。しかし、それだけでなく校舎内を徘徊するものたちもいる。韓国の怪談ではどんなものたちが徘徊しているのか。韓国の事例を見てみることにする。

●事例18. 中学生のとき友達の間で流行した学校に関する怪談がいくつかあった。その中で一番記憶に残っている怪談は友達が話してくれた怪談だ。放課後、学生が夜遅くまで勉強していると、誰もいないはずの廊下からこつこつ<sup>(24)</sup>と歩く靴の音が聞こえてきた。緊張したその学生は息を凝らして座っていた。廊下を歩いてくるその幽霊は、クラス一つ一つのドアを開きながら「あ、ここにもいないね」とつぶやく。そして、その学生がいるクラスのドアを開けた。そのとき、その学生は緊張していて息をしなかった。それで幽霊は人間がいる気配を感じず「あ、ここにもいないね」と言ってドアを閉め、次のクラスに行こうとした。その時、その学生は安心して息をしてしまった。それを感じた幽霊は人間がいたことに気づき、その学生の魂を持って行ってしまった。それでその学生は魂がなくなって死んでしまったという怪談だ。

各教室のドアを開けるという怪談は日本にもあり、その音響効果がこの種の怪談の特徴であろう。日本だと忘れ物を取りに行ったとなる状況が、夜の教室で勉強していたというのも、一時期なされていた自律学習<sup>(25)</sup>という制度を考えると納得のいくところである。ところで、なぜ幽霊が徘徊しているのであろうか。

●事例19. もう一つ聞いた怪談の内容は私の学

校ではなかったが、小学生の間でとても有名だった怪談でした。昔、全校1位の子供と2位にしかねない子供がいた。毎回全校2位の子供はある日、全校1位の子供を屋上から落として殺しました。そして2位の子供は全校1位になります。ある日、その子供が夜おそくまで学校で勉強をしていたら、廊下からコンコンコン<sup>(26)</sup>という音とともに、教室のドアが一つずつ開かれる音が聞こえました。その子供は恐ろしくなり、すぐ机の下に隠れました。その鬼神<sup>(27)</sup>は教室の前にコンコンコンと音を立てながら近付いて来て、教室のドアをがらりと開けました。恐ろしくてその子供は机の下に隠れていましたが、鬼神の頭が下に向いていたから、机の下に隠れていたその子供と目があって、その子供は結局死んだという、そんな内容の怪談でした。

●事例20. 学年2位の生徒が学年1位の生徒を屋上から落として殺した。落ちたとき頭が下で、足が上だったので、その姿で学校中をびよんびよん<sup>(28)</sup>走り回るお化けがいた。このお化けはすべての教室を回って扉を開け、人を探し回ったという。このお化けを避けるためには、机の上や椅子の上へ上がれば、頭が下にあるため見えずにそのまま行ってしまうという噂がある。高校3年生の時に友達から聞いた話。

つまり、自分を殺した犯人を、学校中を回りながら探しているというということになる。ただ、事例18の場合は逆立ちを連想させるような表現はなく、「こつこつ」という足音だった。ところが事例19と事例20では「コンコンコン」なり「びよんびよん」（どちらも韓国語原文では同音）という打撃音に変わっている。屋上から突き落とされたとき、頭から落ちたので、逆立ちした姿になってしまったということであろう。そして逆立ちしながら徘徊するため、頭が床に当たり「コンコンコン」なり「びよんびよん」という音を立てるのである。ここで事例16を再度見てみることにする。元来はトイレにいた卵おばけなのであるが、「卵に手と足がついたおばけで逆立ちで歩くということ。歩く

とき、頭を床に打ちつけながら歩くので“トントントン”という音がします」とある。現在の学校のトイレは明るく、清潔である。とても卵おばけが住めるようなところではない。トイレという特異空間を舞台としていた卵おばけが、トイレという活躍舞台を失い、何らかの形で事例18と重なり合って、事例19や20のようになったのではないかと考えられる。

### Ⅲ. 都市伝説

#### 1. 赤いマスクの女

日本では口裂け女として知れわたった都市伝説であるが、これが韓国では「赤いマスクの女」として広まった。

●事例21. 韓国では赤いマスクの女が、最も有名な都市伝説ではないかと思います。90年代後半に韓国で流行のように広まった都市伝説です。しかし、実際には、この話は日本で1979年春に始まった都市伝説です。日本での名前は「口裂け女」と呼ばれていました。違う点は、マスクが白であること、韓国は包丁を持って日本ははさみを主武器として使用する所です。日本の口裂け女は、「私きれい」と尋ねて子供を誘拐して、赤い屋根の家に連れて行って殺したそうです。人の言葉で伝えられた都市伝説なので地域によって異なる内容もありました。ある時は全く違う内容である時もありました。韓国の赤いマスクの都市伝説が始まったのはプサンと考えられています。どうやら日本と韓国を行き来していた商人たちが韓国に広めたと思われます。三姉妹がいました。その中で最も美しかった末っ子に嫉妬したお姉さんたちは、彼女の口を裂いて2階から突き落としたそうです。彼女は元は白いマスクをつけていましたが、血のせいでマスクが真っ赤になったそうです。また、2階から落ちたトラウマのため、2階を恐れているそうです。そして彼女は会う人々に「私きれい？」と聞いて「きれいだよ」と答えたら、マスクをとって「これでも」と聞きます。ここで「いいえ」と答えたら殺してしまい、ま

た「きれいだよ」と答えたら「お前もきれいに  
してあげる」と言いながら口を裂くそうです。  
プサンでは、この都市伝説のせいで小学生たち  
が家から出るのが怖くて集団登校拒否を起こす  
事件もあったそうです。この都市伝説がソウル  
にいたると、当時流行のように広がった整形と  
その後遺症による話が加わって、彼女が不法整  
形をして口が裂けてしまい、彼女はその医師を  
殺してから、その医師のコートを着て、医療用  
マスクをつけて医療用はさみを持って歩き回る  
という設定に変わりました。そして、その整形  
医院が2階にあったため2階を恐れているとな  
り、元の設定もある程度維持していました。こ  
のように口から口へと伝わる特性のために、中  
間で話を伝える人により話が違ってきて、その  
出所も不明になります。都市伝説の始まりと各  
地域の違いがなぜ生じたのかを調べてみるのも  
面白そうです。何人かの人々が調査したところ、  
最初の話の出所は子供が学校が終わったらま  
っすぐ家に帰って来てほしい心で親が広めた  
噂だというのが最も有力です。面白いのは日本  
で始まって韓国まで広まったため、噂の広がる  
過程を調査するためにCIAが始めた噂だと言  
う説もあります。

まさに学生のレポートという感じではある  
が、よく説明してくれている。ウィキペディア  
の韓国語版によると<sup>(29)</sup>、韓国では1993年、そし  
て2004年頃と周期的にはやったとある。ただ事  
例21によると釜山で三姉妹だったのがソウルに  
上がってくると整形失敗に変わったと指摘して  
いるが、三姉妹も整形失敗も、既に日本で語ら  
れていた話である。実際に下記のように対処法  
を説明している事例もあるのだから、日本同様、  
いろいろなバージョンがあるものと思われる。

●事例22. 道端で、大きいマスクをかけてかま  
を持った髪の毛の長い女が、「私きれい？」と話を  
かけてきたら、「ふつう」と答えるか、「ポマー  
ド」を三回言わなければいけない。そうしないと、  
かまを持って追いかけてくる。小学生のこ  
ろ友達からききました。

## 2. 香港ババお化け<sup>(30)</sup>

事例21で、「最初の話の出所は子供が学校が  
終わったらまっすぐ家に帰って来てほしい心で  
親が広めた噂だというのが最も有力です」とあ  
るが、実際に親たちが子供に早く帰らせるため  
に広めたとされるものに「香港ババお化け」と  
いうものがある。

●事例23. 1990年代、小学生たちの間でこうい  
う怪談が流行りました。お手洗いに「香港ババ  
お化け」という化け物が出るという話でした。  
香港ババお化けは100mを10秒台で走れる、超  
人的な能力を持っていて、顔の片側は猫、そし  
て片方は人間で、「半人半猫」の姿をしていた  
と言われていました。主に子供たちを攻撃して  
命を奪うんですけど、子供を殺す前にいろん  
な質問をします。それに答えるとき、語尾に「香  
港」を付ければ助かるという噂もありました。  
また、爪を見られると爪を抜かれるという話も  
ありました。そういう噂にびびった子供たちが、  
ポケットから手を出さなかったり、指に絆  
創膏を巻いて出かけたりしたとも聞いていま  
す。地方によって怪談のバージョンは少しずつ  
違うらしいです。トイレから香港ババお化けが  
出るという説もありますけど、道を一人で歩い  
ているとき登場するという噂もありました。

これは1980年代後半から1990年代にかけての  
ものであるが、韓国のテレビ局であるMBCの  
『MBC ニュースデスク』でも取り上げられた<sup>(31)</sup>。  
この都市伝説誕生の有力候補の一つとしては、  
当時ソウル江南（カンナム）地域<sup>(32)</sup>の父母が子  
供誘拐事件や人身売買などの凶悪犯罪、そして  
放課後の各種有害業者出入りに対する対策とし  
て子供の帰宅を早めるための手段として怪談を  
作り、それが広がったのだというのがある。香  
港という地名がつくのは、当時、幽霊を素材に  
した香港怪奇映画が韓国で流行したためである  
ということだ。事例23の場合はトイレに出ると  
あるが、それは多様化されたバージョンの一つ  
なのであろう<sup>(33)</sup>。さらに「半人半猫」の姿とい  
うのは、なんとなく人面犬を連想させる。時期

的に見て「口裂け女」や「人面犬」の影響を受けている韓国の都市伝説と言えるであろう。

### 3. 美容ゴマ<sup>(34)</sup>

エステは韓国の観光産業になった感があり、ソウルのショッピング街などでは日本人向けのエステ商品が目白押しである。そして肌の老化防止に効果があるとして黒ゴマ関係の商品も数多く出回っている。美容ゴマという都市伝説は、その黒ゴマに関するものであろう。

●事例24. 肌がどんどん老化し皺ができることに悩む女性がいました。その人は肌にいいものであれば、あらゆる療法を悔いない人でした。誰かがゴマを水に解いて入浴をすると肌に良いという話をすると、それを聞いて、その人はそのまま実行しました。ところが、その人がお風呂に入ってから数時間が経っても「ちょっと待って、ちょっと待って」と言ってもなかなか出てきません。怪訝に思ったその人の母親がロックされたバスルームのドアを破って入ってみると、皮膚の割れ目にゴマ粒が数え切れないほど入っていて、その人は呆けた表情をしながら爪楊枝で全身のゴマ粒をとっていたそうです。

肌を小麦色に焼きたくて多くの日焼けサロンに通い、最後は内蔵が生焼けの状態になったという、いわゆる「日焼けサロン」を連想させる都市伝説ではあるが、韓国の女子高で伝えられているものであると言う。2007年5月封切の韓国時代ホラー映画『伝説の故郷』<sup>(35)</sup>に一挿話として取り入れられ、話題となった。

### 4. インド太った女事件<sup>(36)</sup>

「消えた花嫁」という都市伝説がある。新婚夫婦が旅行先でブティックに入る。何軒目かのブティックで、新婦が試着室に入ったまま出てこない。店員に頼んで探してもらったが見つからない。失意のまま夫は帰るが、何年後かに友人から妻を目撃したという話を聞く。両手両足を切られショーに出されていたと言うストーリーだ。これは世界中に広がっている都市伝説

なのだが、韓国にも同様のものがある。

●事例25. この話は多くの人々が知っている話で、「インド太った女事件」という名前です。ある新婚夫婦がインドに新婚旅行に行くことから話が始まります。インド旅行に行った夫婦はインドの空港に到着してガイドに会います。ガイドは非常にすまないと言う顔をしながら、本来予約しておいたホテルに問題が起き、値段が安いホテルに予約をしておいたと言いました。夫婦は気に入らなかったが仕方なくガイドが案内するホテルに行きました。ホテルに到着した後、夫はスーパーで買う品物があるからと、部屋に妻だけを残して出かけた。部屋に帰って来た夫は妻がいないのにびっくりしてガイドに連絡を取って警察に届けましたが、妻は見つかりませんでした。結局、妻を探せないまま夫は韓国に帰国しました。2ヶ月後、インドの韓国大使館から妻を見つけたという連絡を受けました。インドに行った夫は、空港に迎えに来たガイドと一緒にサーカスのようなところに行きます。そこで夫は、手足を切断されて見世物になっている自分の妻を見てショックを受けます。ガイドはあの日、人身売買団によって妻が売られ、ここに来ることになったようだと言い、サーカス団にお金を渡せば妻を連れて行くことができると言いました。しかしショックを受けた夫は自分が持っていたお金を全部ガイドに渡し、そのまま帰りました。調査してみたら、そのガイドが人身売買を主導した犯人だったと言う、そんな衝撃的な内容の怪談です。

「消えた花嫁」の派生とみられるものに「ダルマ村」と呼ばれるものがある。中国旅行をしていた日本人が「日本達磨」と書かれた見世物小屋を見つけ、興味本位に中に入ってみる。すると中にはダルマのように手足のない人形がずらりと並べてある。気味が悪いから出ようとすると「君は日本人だろ。僕は…」と助けを求めてくるというストーリーだ。「インド太った女事件」の場合、「消えた花嫁」での基本プロッ



トとされている試着室が出てこない。そして、新婦が太っているかどうかの描写はないにもかかわらず、「インド太った女事件」という名前で呼ばれている。「達磨→太った女→インド」という関係が見えてくるのではないだろうか。

## 5. エレベーターの男

2004年7月18日、連続殺人犯の柳永哲（ユ・ヨン Chol）が逮捕された。2003年9月から2004年7月までの間に20名を殺害したとされる<sup>(37)</sup>。柳永哲の精神鑑定結果からサイコパス（精神病質者）という言葉が流行語にもなった。

●事例26. ある女子大生が夜、エレベーターに乗ろうと待っていると、帽子を被ってマスクで顔を全部隠した男性が横に来て一緒にエレベーターに乗ろうとした。その時、同じ大学の学生と思われる男の人が一緒にエレベーターに乗り込んだ。男の子が6階、女の子は14階、そして帽子を被った男性が18階を押した。エレベーターが6階に向かう途中、男の子が「あ、そうだ。チーム・レポートまだ終わっていないんだけど、うちに寄って残りやってかない？」と女の子に馴れ馴れしく話しかけてきた。女の子は初めて会う人がそう話しかけてきてとてもびっくりしたが、その男の子の表情があまりにも差し迫った感じだったので、変だなと思いながらも「わかった」と答えた。そしてエレベーターが6階に到着すると男の子について一緒にエレベーターから降りた。降りてから女の子は男の子に一体どういうことなのかと尋ねると男の子はこう答えた。一緒に乗っていた男性のジャケットの中から刃物が光るのが見えた。そして、その帽子を被った男性の正体はなんと連続殺人犯の柳永哲だった。

これは、友達の家でパーティーをしていたら、突然一人がコンビニに行こうと言い出す。仕方なく全員で部屋を出ると、「実はベッドの下にナイフを持った男がいたんだ」と言う「ベッドの下」と呼ばれる都市伝説と似通った面を持っている。柳永哲の姿が帽子とマスクと

いうのは、逮捕後の現場検証や裁判などで見せた顔が帽子とマスクで顔を隠していたため、そのようなイメージができたのであろう。インターネットで検索してみると、「姉妹で暮らしているアパート。鏡の前にいた姉が偶然、ベッドの下に視線を移すと、そこに誰かがいるのが見えた。まさに柳永哲だった。姉は妹に、今すぐアイスクリームを買ってくるように言った。妹は言われた通りアイスクリームを買いに行った。そして妹が帰ってきて発見したのは姉の死体だった。姉は柳永哲が自分を殺しに来たのを知るや、妹だけでもと思い、自らを犠牲にしたのだ。」<sup>(38)</sup>という都市伝説も紹介されていた<sup>(39)</sup>。姉は殺されてしまったが<sup>(40)</sup>、「ベッドの下」により近い内容になっている。

## 6. 誘拐団とおばあさん

香港ババお化け誕生の理由として「父母が子供誘拐事件、人身売買など凶悪犯罪と放課後の各種有害業者出入りに対する対策として子供の帰宅を早めるための手段として怪談を作り出した」という説があることを紹介した。これは誘拐事件や人身売買がありえることと認識されているからであろう<sup>(41)</sup>。

●事例27. 高校の時、クラス内で流行った話。ある女子高生がバスに乗ったが、おばあさんがいきなりけんかを売り始めた。女子高生は無視しようと思ったがおばあさんがひどいことを言いきり、彼女も我慢できずけんかを買った。おばあさんは彼女に外で決着をつけるから、降りようと言った。バスのドアが開き、おばあさんが降りた後、女子高生も降りようとした瞬間、ドアが閉まった。女子高生は怒って運転手に「降りようとしたんですけど、どうしてドアを閉めるんですか」と聞いた。そしたら、運転手はこう答えた。「さっきからずっとバンが付いてきてるよ。」そして女子高生が外を見ると、先のおばあさんが惜しそうな顔でバンに乗った。

誘拐に関する都市伝説で有名なものに「遊園地の人さらい」というのがある。遊園地で子供

が迷子になる。係員といくら探しても見つからない。そこで出入口を封鎖して人の流れをチェックする。その結果、子供を変装させて連れ出そうとしていた誘拐犯を見つけることができたというものだ。一見、関係のないように見える二つの都市伝説だが、ドアを閉めることによって誘拐を防ぐ、そして未遂で終わるというところに共通点を感じる。また、第三者の機転で助かるということについては、事例26につながることもあるだろう。

●事例28. 最近人身売買団が市内で人を誘拐する事件が起きたといううわさが立った。おばあさんが道を歩いている女の人に「道がわからないからちょっと教えてくれ」と話かけながら、人身売買団が乗っている車に連れて行って誘拐するといううわさだ。そんなことは起こらなかったことが判明したが、その話は都市伝説として伝わっている。これはニュースで放送されたこともある。

韓国文化は孝の文化だと言われる。親孝行の延長に年長者への敬いがあり、社会秩序が成り立つというのだ。しかし、おばあさんによる誘拐の都市伝説が広がったことによって、この孝が機能しなくなったという。困っているお年寄りがいても、自分では直接助けず、近くの大人に頼みなさいと親が言うのだそうだ。

## 7. 三豊（サンブン）百貨店

1995年6月29日17時57分、営業中であった三豊百貨店は突然、5階建ての建物の一部を残し崩壊した。死者502人・負傷者937名という世界的にも例のない大惨事だった。

●事例29. ソウルの瑞草洞（ソチョドン）にあった三豊百貨店に関する都市伝説です。1995年6月29日に起きたこの事件はいろんな怪談を生み出しました。実際事件が起きた場所は、私が今住んでいるところから3分ぐらいの距離で、すごく近いところです。この話は友達から聞いた話です。事件当日、友達のお母さんは三豊百貨店に買い物に行こうと思い、当時6歳だった

友達を家において玄関を出ようとしたそうです。その時、普段あまり泣かない子だった友達がものすごい勢いで泣き出して、友達のお母さんは買い物に行くのをやめたそうです。そして1時間ぐらいして、事故が起きたそうです。その百貨店が崩壊した場所には、事故後、すぐに新しい商店とアパートができました。足のない子供の幽霊が出たり、人がいきなり消えたりと、いろんなお化け話がありました。高級アパートができてから8年。今は沢山の人が住んでいます。

友達の直接体験談のような構成にはなっているが、友達がお母さんから聞いた話という、都市伝説の基本パターンを反映している。足のない子供の幽霊や人がいきなり消えるというのは単なる噂話として付け足されているに過ぎず、都市伝説としては不十分な事例ではあるが、三豊百貨店の名前を直接出しているので紹介してみた。次の例は三豊百貨店の名前こそ出ていないが、誰が見ても一目瞭然である。

●事例30. ある主婦が子供を連れて百貨店でショッピングをしている時のこと。子供が早く出ようとだだをこねながら泣き続けたため、なだめようと外へ出た。外に出て、なんでずっと泣いていたのかと聞いてみると、子供が泣きながら、百貨店の人たちの横に黒い服を着た人たちが一人ずつくっついていて怖いと言った。そのとき百貨店が崩れた。

## 8. 金ミンジ怪談

「金ミンジ怪談」は韓国語版ウィキペディアの分類「大韓民国の都市伝説」で紹介されている12話のうちの一つだ<sup>(42)</sup>。

●事例31. 金ミンジ怪談は1990年代に流行った、韓国の貨幣のデザインに関する都市伝説です。韓国造幣公社社長の娘だった金ミンジさんが拉致され、バラバラ殺人されたため、社長が貨幣の図案に金ミンジの名前とばらばらになった体を分けて描き入れるよう指示したというものです。軍隊で聞きました。

確かに、いろいろなデザインに隠し文字や隠し絵が入っているということはよくある<sup>(43)</sup>。しかし、1990年代に流行ったとなると年代的に少し合わない。1983年から2002年までの発行紙幣は千ウォン札は1983年発行、5千ウォン札は1983年発行で2002年改良、1万ウォン札は1983年発行後、1994年と2000年に改良となっている。それに、韓国造幣公社社長の娘が誘拐されバラバラ殺人までされたのなら、それを隠し通せるわけがない。ところが、その事件については都市伝説すら存在しないのに、紙幣デザインの方だけが都市伝説化しているように思われる。一説によると、ミンジは社長の娘ではなく幹部の娘で、その娘が社会科見学に来たとき幹部の部下が誘拐し身代金を要求したと言う。ところが父親が身代金を払えなかったので犯人はミンジを殺してバラバラにし、造幣所の造幣機械の中に隠した。それがもとで、貨幣や紙幣の一部にミンジの体が浮かびあがるようになったというものもある。90年代以前のものであろう。そのほうが都市伝説としては納得がいく感じがする<sup>(44)</sup>。

## 9. 自由路の幽霊

2007年頃、自由路<sup>(45)</sup>の幽霊は韓国の複数の芸能人が目撃したとして有名になり<sup>(46)</sup>、その後も多くの目撃者が出てテレビでも取り上げられた。  
●事例32. 自由路の幽霊話は、テレビでこの話が話題になっている時に、友達から聞いた話です。自由路は京畿道の高速道路です。この自由路では幽霊がよく目撃されるそうです。友達から聞いた幽霊の姿は、黒のバーバリコート<sup>(47)</sup>を着ていて、サングラスをかけた女の人が夜中に自由路で、車に乗せてもらおうとしているように立っていたそうです。女性を乗せようとして近寄って見ると、サングラスだと思ったのは間違いで、目の部分に穴があいていたそうです。それで反対側の車のライトが見えたそうです。この話が話題になってから、目撃者が増えはじめたので、警察が自由路付近を調査したとこ

ろ、交通事故にあった女の死体を発見したそうです。多くの人が目撃し、経験したほど有名な話しですけど、どこまでが真実なのかはわかりません。

ただ、この話にはいくつかのバリエーションがある。

●事例33. 夜遅く自由路を車で通ると白いシャツにジーンズを穿いた女が道端で車をつかまえようとする。夜中なのにサングラスをかけているからおかしいなと思い通り過ぎながら見ると、それはサングラスをかけた女性ではなく、目のない女の幽霊だったという。車に乗せると死ぬとか自由路で殺人にあった女性だと言う話もあった。この話は前に韓国のサプライズという番組<sup>(48)</sup>で見た話だが、その当時本当に見たという人もたくさんいた。

目のない幽霊というのは同じであるが、服装に違いがありすぎる。韓国にも「タクシーの幽霊」と同じような都市伝説があり、たいていは墓地に行くというパターンである。自由路の幽霊の中にも、車に乗せてあげたら途中でいなくなった。目的地をナビゲーションで探してみたら墓地だったというのがあるという<sup>(49)</sup>。もともとは別の都市伝説が、マスコミで騒がれることによって「自由路の幽霊」という一つの枠にくられたのではないだろうか。

## 10. 国会議事堂の跆拳道 (テコン) V<sup>(50)</sup>

1970年代から80年代にかけて、韓国の子供たちに絶大な人気があったアニメ映画に「跆拳道V」のシリーズがある。当時少年期であった現在の大人たちには未だに忘れられないものだとも言う。また、「跆拳道V」は外来アニメが多い中で純韓国製のアニメでもあったため、子供たちにとっては韓国の誇りでもあったのだろう。

●事例34. ソウルの汝矣島 (ヨイド) にある国会議事堂の地下に「跆拳道V」というロボットがあって、国家の危機 (戦争など) にはそのロボットが地下から現れ、敵を打ち倒すという都市伝説があります。跆拳道Vは韓国のアニメに登

場するロボットです。韓国最大のインターネット検索サイトである「ネイバー」の「知識 in」(yahoo! Japan の知恵袋と同じ機能)に「本当に国会議事堂の地下から跆拳道Ⅴが出ますか?」と質問する人があるのを見たことがあります。

実は、跆拳道Ⅴが隠されているところは国会議事堂だけではない。あと、大統領府である青瓦台、そして韓国科学技術院<sup>(51)</sup>の池の地下にある秘密基地にも隠されているという。

日本にも同様の都市伝説がある。一つは東京都庁であり、もう一つは筑波大学。ただ、どちらも建物が巨大ロボットに変身すると言うものである。東京都庁は国会議事堂か青瓦台に、筑波大学は韓国科学技術院に相当するであろうか。特に筑波大学には地下に秘密基地があるという都市伝説もあるので、韓国科学技術院と一対になっていると言えるであろう。

●事例35. 誰もが聞いてもありえない話ですが、信じたいソウルの都市伝説があります。高校の時、ネットで見た話です。国政をつかさどる場所である国会議事堂にロボット跆拳道Ⅴが隠してあるとのこと。韓国に危機が近づいたら、国会議事堂のドームが開き、そこからロボット跆拳道Ⅴが現れるという噂が広がりました。国会議事堂の広さがちょうどロボットが入るくらいの大きさだったので、より信憑性が高くなったと思います。もちろん単に市民の期待がこもった噂だというのが真実ですが。

#### IV. おわりに

今回の調査で、韓国の大学生がどんな学校の怪談を伝承し、どんな都市伝説を伝え合っているのか、その一端を見ることができた。たいいていの学校には百の怪談があると言われており、その百の怪談すべてを知ると死ぬと言われていたと言ふ<sup>(52)</sup>。日本の「百物語」などと通じるものがある。

また、今回の調査で一番驚かされたのは、先述したようにトイレの「卵おぼけ」が語られな

くなったことである。学生たちに話を聞くと、トイレの「卵おぼけ」に関してはほとんどの学生が知らないと答えた。私が韓国に来た1980年代はもちろん、90年代でも当然の如く話されていたと記憶しているのだが。それに反して、「赤い紙、青い紙」や「白い手」に関する怪談はほぼ全員の学生が知っている。彼らに言わせると、テレビのマンガやインターネットの動画を通してごく普通に接しているのだそうだ。そのようにして接しているのなら、彼らにとっては「卵おぼけ」よりも身近な存在であると言えるだろう。現に、「卵おぼけ」がどんな形をしているのか知らない学生の方が多かった。現在でも盛んに語られ、むしろ愛されているのではと思われる日本の「花子さん」に比べ、好対照である。果たして、明るく清潔になったということだけで、韓国のトイレから「卵おぼけ」が消えていったのであろうか。「花子さん」の健在ぶりを考えると、何か別のメカニズムがあるのではないかと思われる。

都市伝説に関しては、日本や海外で流布しているものと共通しているものも多く見られるが、さらにそこに、韓国の事情なり事件なりが加味されて新しいバージョンになっていることがわかる<sup>(53)</sup>。

最後に、筆者がいる韓国外語大学には脱北者の子女が数多くいるという話を聞いたことがある。詳細は発表されていないのでそれこそ都市伝説かもしれないが、もしできることなら、脱北者子女を対象に、北朝鮮の怪談や都市伝説を調査してみたいものだと思う。

#### <注>

- (1) 韓国各地の伝説や民間説話をもとに構成された韓国放送公社作成のドラマ。1977年から始まり、その後4期に分けて668回放映された。
- (2) 実際、都市伝説と答えたものの中に、伝説や民間説話などがいくつか見られた。
- (3) 韓国外語大学のeラーニングシステム。
- (4) 都市伝説に関しては特に「韓国のミミ人形に

関する都市伝説」という項目も付けた。拙稿「リカちゃん人形に見る都市伝説」『日東学研究』第2集江原大学校日本研究センター2010年と比較するためである。ミミ人形は韓国の代表的着せ替え人形で、日本のリカちゃん人形に相当する。しかし、実際の回収例にはミミ人形の事例が数例しか見られなかったため、本稿では都市伝説の中に含めることにした。

- (5) 一つの事例に何種類かのテーマが含まれているものも存在した。それゆえ、実際の事例数はもっと多くなることになる。
- (6) 学生の書いた日本語訳を尊重しながら、韓国語原文と照らし合わせ、文法的誤り等は修正した。
- (7) 学生は韓国語でも日本語でも銅像としていたが、実際には石像であるものが多いと思われる。ここでは原文を尊重して銅像としておく。
- (8) 兄妹がベンチに腰掛けて一緒に本を読んでいる石像は“독서남매”(読書男妹)というのだが、それ以外には特に名前がついていないようである。
- (9) 李朝第4代の国王。ハングルを作成させたことで有名。韓国人が最も尊敬する歴史上の人物で1万ウォン札の肖像にもなっている。
- (10) 檀君は韓国の始祖神の号。名は王儉。高麗時代に編まれた『三国遺事』では、檀君王儉をどの王朝の始祖ともしないで朝鮮全土の開国神・始祖神として取り上げている。
- (11) 李朝の名将。字は汝諧。諡号は忠武。文禄・慶長の役(韓国名壬申・丁酉倭乱)における水師。亀甲船を作り日本の水軍に連勝したことで有名。韓国の英雄。
- (12) 基本形は「夜12時を過ぎると李舜臣銅像と世宗大王の銅像が戦う」というもの。
- (13) 墓の位置や方角は風水地理により、青竜(向かって右の丘陵)、白虎(向かって左の丘陵)、内明堂(前面の平地)、主山(後方の山型の地形)、案山(墓の前方の小高い地形)などを見て決める。
- (14) この場合の幽霊とは、元来「悪い人」の意味ではなかったのかと思われる。悪い人がいるから近づくなと大人が言う時、子供にわかりやすく幽霊という表現を使ったのではないかと思わ

れる。

- (15) だとしたら、過疎化した地域には新しい怪談が生まれることになるのだろうか。
- (16) 「夜になって、大事なノートを学校に忘れてきたことに気がついた生徒が学校に行く。そして自分の教室のドアを開けたらそこには見慣れた教壇も机もなく手術室になっていた手術台の横にいた看護婦が生徒に気づき、手術道具の載ったワゴン車を押しながら生徒の方に…」という形式の怪談。
- (17) 韓国の女性革命運動家。3・1運動に始まる万歳運動を主導したが逮捕され、18歳で死亡。
- (18) 事例12で「頭にきた先輩はバケツに水を汲んで上から水をかけるという行為をした」というのも、これと関係あるのかもしれない。
- (19) 달걀귀신と云う。昔から韓国のトイレにいるとされてきた妖怪。
- (20) 韓国語原文では“투투투”。互いに打ち合う音を意味する。
- (21) 韓国語版ウィキペディアには日本と韓国の都市伝説とある。日本語版では日本発祥の都市伝説で韓国でも著名であるとある。筆者は1990年代には既に聞いた記憶がある。しかしその時は달걀귀신이赤か青か尋ねると言う内容であったと記憶している。
- (22) 10名程度のクラスで学生たちに再度確かめてみたが、多くの学生が卵おぼけを知らず、トイレとの関係を知る者は皆無であった。
- (23) “달걀귀신이 뒷간 (요즘 화장실과는 개념이 다르다) 에 나타난다” 韓国日報より引用。<http://dc.koreatimes.com/article/693620>
- (24) 韓国語原文では“뚜벅뚜벅”。足音。
- (25) 全斗煥政権時、教育の機会均等という名目でなされた政策。夜10時頃まで学校に残って勉強をした。塾や予備校への負担を減らす側面もあった。
- (26) 韓国語原文では“콩콩콩”。콩は板の間などに小さくて重いものが落ちたときの音。
- (27) 韓国語原文では“귀신”。鬼神は幽霊や化物のこと。

- (28) 韓国語原文では“콩콩”。26に同じ。
- (29) [http://ko.wikipedia.org/wiki/%EB%B9%A8%EA%B0%84\\_%EB%A7%88%EC%8A%A4%ED%81%AC](http://ko.wikipedia.org/wiki/%EB%B9%A8%EA%B0%84_%EB%A7%88%EC%8A%A4%ED%81%AC)
- (30) 韓国語原文では“홍콩할매귀신”。
- (31) 1989年6月24日放映。
- (32) ソウルの中心を流れる漢江の南側に位置する。高級アパートが多く、教育熱の盛んなことで有名。
- (33) 卵おぼけがトイレからいなくなったためであるろうか。
- (34) 韓国語原文では“미용 깨”。
- (35) 김지환 각본・감독 “전설의 고향”。
- (36) 韓国語原文では“인도 통통녀 사건”。
- (37) 本人は26名殺害したと主張している。
- (38) <http://blog.naver.com/PostView.nhn?blogId=venice79&logNo=30107143260&beginTime=0&jumpingVid=&from=search&redirect=Log&widgetTypeCall=true>
- (39) 2008年2月に『追撃者』という柳永哲事件をモチーフにした映画が作られ、その時にインターネット上でいろいろな都市伝説が流れたようだ。
- (40) 実際の事件では、姉妹のマッサージ嬢の姉を狙ったのだが、妹が来たので妹を殺害したというのがあった。
- (41) 筆者自身、80年代の末だったと記憶しているが、教材録音の仕事が終わり女性編集員に女性教師と連れ立って夕食に行こうとした時、突然ドアを開けたバンが近づいてきて「どこまで行くんだ。ただで乗せてってやる」と言われたことがある。結局そのバンは止まりもせず走りすぎていったが、同行の編集者たちは非常に怖がっていた。
- (42) [http://ko.wikipedia.org/wiki/%EB%B6%84%EB%A5%98:%EB%8C%80%ED%95%9C%EB%AF%BC%EA%B5%AD%EC%9D%98\\_%EB%8F%84%EC%8B%9C%EC%A0%84%EC%84%A4](http://ko.wikipedia.org/wiki/%EB%B6%84%EB%A5%98:%EB%8C%80%ED%95%9C%EB%AF%BC%EA%B5%AD%EC%9D%98_%EB%8F%84%EC%8B%9C%EC%A0%84%EC%84%A4)
- (43) キリンビールのラベルに隠し文字があるという都市伝説(?)は有名だ。キリンのホームページによると「ラベルの『麒麟』のたてがみの図柄をよく見ると見つかるのが『キ・リ・ン』の小さな文字。この隠し文字は、遅くとも1933年(昭和8年)には入れられていました。当時のデザイナーが遊び心でデザインしたとも、偽造防止のためとも言われていますが、明確な理由は謎であるところが、『麒麟』のラベルをより神秘的にしています」とある。
- (44) [http://webzine.hallym.ac.kr/search/search\\_content.php?f\\_uid=1190](http://webzine.hallym.ac.kr/search/search_content.php?f_uid=1190)
- (45) 京畿道高陽市から坡州市へとつながる自動車専用道路。最高時速90キロ。
- (46) 韓国のテレビ局3社がある汝矣島へとつながるため、芸能人がよく利用するという。
- (47) バーバリー社のものでなくても、重厚な雰囲気のあるコートをバーバリーと呼ぶ。
- (48) 韓国の放送局MBCで放映している番組。“신비한 TV 서프라이즈”。ミステリー探求がテーマである。
- (49) <http://funky802.com/expo/compi.php?offset=36>
- (50) 1976年に公開された劇場用アニメ第1弾の原題。その後シリーズ化された。日本のマジンガーZに相当する。
- (51) 韓国の理工系センター大学として教育科学技術部の傘下機関に指定されている特殊大学。
- (52) 「これは私が小学生の頃に学校でうわさになった話です。私の学校は韓国戦争の時、遺体を埋葬した場所で、百の怪談があるそうです。しかもその話を全部知ると死ぬという話が流行ってました。」(日本語科4年女子)「学校に関する怪談100個を全部知ってしまうと雷にあたって死ぬ。」(イタリア語科4年生女子)
- (53) しかし、金ミンジ怪談のような都市伝説が日本にあるとは聞いたことがない。

<参考文献>

- 宇佐和通2009『都市伝説の正体』祥伝社  
 世界博学倶楽部2010『都市伝説の真相』PHP  
 常光徹2002『学校の怪談』角川書店  
 松山ひろし『3本足のリカちゃん人形』イースト・プレス  
 (客員研究員・韓国外国語大学校教授)